

【キーワード】

〔施設種別〕 ☐ 高齢者施設 ☐ 障がい者施設 ☐ 子ども施設 ☐ 住宅 ☒ 観光協会
 〔運営主体〕 ☐ 市区町村 ☒ 法人 ☐ NPO ☐ 個人 ☐ 補助金 ☐ 内閣府 ☐ 国土交通省 ☐ 厚生労働省
 〔建物形式〕 ☐ 1 棟単体型 ☐ 複数棟集合型 ☐ 団地型 ☐ 建物状況 ☐ 新築 ☐ 増築 ☒ 改修 ☐ 一部改修 ☐ 既存
 〔対象者〕 ☐ 高齢者 ☐ 障がい者 ☐ 子ども ☐ ファミリー ☒ 多世代



写真 1. 外観写真

日本初の重要伝統的建造物群保存地区に指定された妻籠宿に妻籠観光協会は拠点を置く。南木曾町にとって、一番大切なのは妻籠の「観光」と考え、妻籠の伝統工芸品などのお土産や観光客が知らないような色々な場所・魅力を、事務を委託している一般社団法人南木曾町観光協会と発信している。近年、外国人観光客が増加している。

■施設概要

所在地：長野県南木曾町吾妻 2196-1

施設種別：観光協会

運営主体：妻籠観光協会（南木曾町観光協会が事務を委託）

構造・階数：木造・1 階

移転時期：2020 年 4 月

訪問日：2021 年 3 月 26 日

訪問者：荻原雅史，森野耕司

お話を伺った方：藤原洋平氏（旅館藤乙を経営）

（こちらの記録をベースに、以下にまとめる）



写真 2. 敷地周辺 googlemap より

JR 南木曾駅から車・バスで 5 ～ 10 分程度の場所に設立している。

1. 妻籠宿について

1) 妻籠概要

妻籠宿は中山道 42 番目の宿場であり、長野県木曾郡南木曾町にある。中山道と飯田街道の追分に位置し交通の要衝であった。江戸時代に中山道沿いに宿場を作る時に宿寄席をやった場所であり、周りから人が寄せ集まり宿場になった場所である。

2) 妻籠の歴史

町並み保存活動をおこなう前の妻籠は、観光客もほとんどおらず人通りも少ない場所であった。町並み保存活動がはじめられる中、ディスカバージャパンが、古きよいものとして紹介したのが妻籠宿である。江戸時代の宿



写真 3. 妻籠宿の町並み

中山道の町並み，風景が広がっている。

参考文献

- 1) 妻籠観光協会 HP <http://tumago.jp/index.html>
- 2) 公益財団法人 妻籠を愛する会 <http://tumagowoaisurukai.jp/>
- 3) 旅館藤乙 <http://www.tsumago-fujioto.jp/>



写真 4. 重要伝統的建造物群保存地区についての看板
重要伝統的建造物群保存地区の詳細事項が記載してある。

場の町並み保存をはじめたのが 50 年前。その当時、多くの民家が宿泊施設をして営業し始めた。多い時で 60 軒ぐらいが営業をしていた。お土産店は 2-3 軒で、飲食店は当時少なかった。

それまで、妻籠宿に住む人は外に出稼ぎに行く人が多かったが、観光ブームで観光客が来るようになったので、妻籠で働くようになった。自分たちの生活を守るため、また、妻籠の景観があってこそ自分たちの生活が成り立っていると考え、妻籠の町並みを守るために家や土地を「売らない・貸さない・こわさない」という 3 原則を設定し、景観を守るための妻籠を愛する会（事例番号：000）を設立した。「売る」で最も怖いことは、大手資本が入り、守ってきた景観が変わってしまう点である。町並み保存の取り組みをはじめた頃は、細々と商売をやることによって、住民が食べていけるようになると話し合い、泊まり客は 20 人まで、食事は 40 人まで、お土産屋は間口一間までと決めていた。しかし、雑誌の特集などでブームになり観光客が、年間 100 万人近くまで増加した時期や、最近ではインバウンドの影響もあり、年間で 40 万人訪れる状況になると、より売りたい、より観光客がほしいなど、欲が出てきてしまい、最初に決めた規則が変わってきている。

宿泊施設は、地域の高齢化などもあり、年々閉めるところも多くなり、現在では 10 軒しか営業していない。宿泊施設の営業は大変で難しく、現在では妻籠宿内に約 40 軒の店舗があるが、10 軒が宿泊施設で 10 数件が食堂、残りが土産物屋である。

2. 運営概要

1) 運営概要

ここは妻籠宿ではあるが、南木曽町の一地域で、行政などからも大きな支援はなかった。南木曽町は第 2 次産業の工場などがなく、妻籠が観光業で稼いだ税金で成り立っている。そういった点から、南木曽にとって一番大切なのは「観光」と考えている。

もともと南木曽町の役場の中に、南木曽町観光協会があったが、2019 年、独立して一般社団法人 南木曽町観光協会（事例番号：1596）になった。南木曽町観光協会の観光資源の大元は妻籠宿であり、妻籠観光協会も南



写真 5. 観光協会内部
妻籠宿に関する情報の展示、パンフレットの配布を行っている。

木曽町観光協会に入会している。観光協会として、妻籠宿から観光客が知らない色々な場所を発信していきたいと考えている。認知度の低い土産（伝統工芸品など）を広めるなど、行政から独立することで周知や広報などの活動が行いやすくなった事柄もある。

2) 妻籠の3団体について

妻籠宿内には妻籠を愛する会（事例 1501）、妻籠観光協会、南木曽町観光協会の3団体が存在している。

妻籠を愛する会は基本的に景観を守るための活動、妻籠観光協会は妻籠を周知する活動、南木曽町観光協会は妻籠を中心とした観光事業を南木曽町内外に広めていく活動をおこなっている。

3) 商工会と観光協会の違い

商工会はもともと商業だけではなく他の業種の活動も含まれている。この界限で元々一番主要な産業は「林業」であった。林業を中心に南木曽町が栄えたが、林業が衰退してきた時に「観光」に力を入れるようになった。現在でも林業の組合もある。イメージとして、業種に関わりなく、地域や事業の発展につながるのが商工会。商工会の観光事業は一部であって、観光のみの観光協会との違い点である。

4) 財源

財源は会費によってまかなっている。会費は月々7,000円、年間8万4,000円であり、全部で42軒程度が協会に所属している。

5) covid-19による客層の変化

10年くらい前から、外国人観光客が増加し、収入が増えることで地元の方は生活をしていた。しかし、covid-19の影響で入国制限がかかり、外国人観光客が訪れなくなったので、民宿や旅館は売上が減少している。2年続いたら相当なダメージを受けると予測され、危機的状況に陥ると懸念される。

3. 立地環境

1) 妻籠の周辺建築物

妻籠宿の2階が滞在できる建物は、明治以降の建物であり、江戸時代は2階に部屋を設けることができず、大黒柱の高さも決められていた。例えば、旅館藤乙（藤原氏が店主を務める宿泊施設）の近くにある350年程たつ



写真6. 観光案内所内部

妻籠宿に関する情報の展示、黒板にはおすすめポイントなどを記載している。



写真7. 妻籠宿のお土産屋

妻籠宿内でお土産屋は間口一間までで商売をすることが決められていた。

お茶屋さんは、他の場所から移築して作られている。また、昭和～明治にかけて火事があり焼けてしまった建物も多くあり、大半の建物は昭和以降に建てられた。

旅館藤乙の建物のように通りから少し引き込んでいるのは、もともとこの場所に建てられた建物ではなく他の場所から移築したためである。旅館藤乙の場合、妻籠宿から車で30～40分離れたところにある屋敷を約65年前に移築して、藤原氏の祖父の代に開業した。現在建っている場所は元は水田であり、街道側は通りに連なって民家が建っていたが、火事で消失してしまった。

2) 妻籠宿の後継者問題

旅館藤乙の場合、娘さんご夫婦と一緒に働いてくれているため、将来の後継者がいるような形になっている。義理の息子がロシア出身のため、文化の違いはあるが、日本らしいところで外国人が働くのも面白いと感じている。他の宿泊施設では後継者がいないところも多い。

経営者の高齢化が進んでいるため、ここから数年で後継者問題は顕著になってくると考えている。妻籠の特徴の1つである町並み保全の「売らない・貸さない・こわさない」という3原則はあるが、外の人にも貸さないと町と町並みを保っていけないと思っている。藤原氏は30年前から貸しだそうと呼びかけていたが、未だに変な人が入って来たら景観を崩してしまうと考えている方もいる。血縁者に空き家などを貸している例もあるが、単に妻籠宿に血縁ある人なら良い人とは限らない。これから子どもが生まれてくる家庭や若い後継者候補がいるところもあるが、彼らが大きくなって仕事するときには、事業が継続できずに終わってしまう可能性が高いと考えている。妻籠側は待っているだけではなく、こういう条件で一緒に仕事しましょうよというように、外部の人を募集するなど空き家活用に向け、動き出さないといけない。また、外部から来てくれた方には行政などが絡んで、生活の支援をしていかないと、外部の方が定住せず、結果的に妻籠がダメになってしまう。今までは「売らない・貸さない・こわさない」といった景観保全最優先でみんなが細々と営んでいくことが妻籠の売りではあったが、この規則により後継者を作りにくい状況になってしまった。

かつての妻籠のブーム時は宣伝しなくても人が来てくれていたおかげで、朝に陳列していた商品が夜になると



写真8. 旅館藤乙外観写真

昔火事があり元の建物が消失してしまった影響で、通りから少し引き込んでいる。(旅館藤乙 HP から参照)



写真9. 休憩所

妻籠宿内の古民家を改修し、シャワー付きの休憩所に変更した。

全てなくなる状況にあり、観光客任せになってしまい、あまり工夫ができていなかった面もある。観光ブームに甘えてしまい、ブームが過ぎてから焦っている状況があった。妻籠を愛するなら、外部から若い人を呼んで色々な知恵を出して商業的にチャレンジすること、また妻籠に来て都会と同じように作業や仕事ができるのであれば空き家を使ってテレワークも重要である。

3) 空き家の活用予定

田舎という問題はあるが、お盆と正月に帰ってくるから他人には貸せないという方もおり、貸したとしても一部だけになってしまっている。しかし、このままこのような状況が続くと今後は空き家だらけになってしまおうと思われる。もっと多くの人が活用でき、人が暮らせるような場にしてくれたほうが良いと考えているが、最近、2軒空き家になっていたところを町に還元したら休憩所になるなど、矛盾が生じている。

現在、空き家活用に向けて進行している大きな計画はない状態。藤原氏は持ち家が空いたら、人に貸せるようにしたいと思っている。しかし、老朽化がすすんだ建物はメンテナンスにも費用がかかってしまう。現状では財団に空き家の管理を任せないといけなくなっているが、それをしてしまうとまちとしての営みの継続ができない。ルールを作った上で、町のためのなるような人材を集めていく必要があると思う。

4) 妻籠と馬籠の連絡協議会について

妻籠と馬籠の連絡協議会は20年前に藤原氏が観光協会の会長だった時に設立した会である。ゴミ拾いや宿場同士での情報交換、お互いの宿場に呼んで迎え入れ、宿場の人たちでつくる料理を振る舞うなどの交流をおこなっていた。盛んに交流していた時期もあったが、交流は年々少なくなっている。

協議会で馬籠と妻籠が協力して何かできないかと考えた際、妻籠か馬籠でベルを買い、到着先で換金をしてもらうなどウォーキングに関連づけた事業も展開している。その他に、完歩証明書の発行が人気となり、売上に繋がり、今でもおこなわ

れている。一昨年から、ウォーキングをする観光客向けの妻籠～馬籠間の荷物の運搬サービスも実施しており、妻籠と馬籠で協力しないとできない事業になっている。この運搬サービスは荷物1つにつき500円。妻籠→馬籠の場合は妻籠に500円、馬籠→妻籠の場合は馬籠に500円が入る仕組みを考えていたが、馬籠から妻籠に来るお客さんが増えている理由から、売上を合算して両方で2分割としている。おとし（2019年）の1年間だけ成功して、その後にcoivd-19が流行してしまった。南木曾町観光協会は現在、収益がないので妻籠観光協会の収益は全て南木曾町観光協会に入れることにしている。

5) 5宿の会女性部について

5宿の会の女性部は中津川の女性の方が発案して結成された。中津川にも宿場があり、中山道約8kmごとに宿場町がある。恵那～中津川～落合～馬籠～妻籠の昔の中山道の宿場街が連携して、観光客を送り合ったり、催し物があった場合は紹介あったり、ポスターで告知あったりしている。将来的には共同のサイトを開設したい。これらの活動は連携しておこなう必要があるため、妻籠だけでは無理な部分もある。この活動は妻籠と馬籠の連絡協議会から一歩ふみこんだ、5宿の会となっている。これも若い人に引き続けたい。

(以上、作成者：東京電機大学 森野耕司，
2021.04)